

四之卷

泉鏡花作

目次

こだま

有明

柴垣

几帳

三日月

こだま

森を出で、見返れば山暗し。風は凧ぎぬ。燈籠みな消えて、星あかりの山路たど／＼しく、草の徑を分け行くに、稲子はら／＼と飛び交へり。

麓におりるなかばにして、土の崩れし處一個處あり。恰も丘の半腹にて、ひとなだれの谷深く、纒に足溜とすべき路の危げなるを、なまじひに知れる身の、今しも其處に臨みつと足數にて計るともに、一步も踏出すこと能はずなりぬ。

路はなほ、一條別にありたるを、恚と知りなばそなたよりぞすいべかりし。引返さむとするに心から身は其細道のなかばとも思ふ處に居て、前にも進み難く、後にも退き難き心地ぞしたる。

わづかのあひだ二間には餘らぬ處を、草の根に縋りなばと、左手なるがけを搔探れば、茨に掌の傷つけり。

詮方なく、イむに、爪尖のこそばゆく、身はわなき、浮足になりて心細さ限りなし。予は草叢に膝を折敷きて、覺束なく星を仰ぎぬ。

空の色たゞならず、野の末、峰の裏あたり、星は數を盡して輝くに、この谷の上の方のみ、雲ありとしもなきに暗うなりたり。

「おい。」

其處ともわかず、人影のありとも見えで、肅びたる太き聲していふ。

こだまの呼ぶと思ひつゝ、予は氷を浴びたる心地して、ひたと草の根に身を寄せぬ。

「誰だ、其處に居るのは誰だ。」

予はいきをこらせり。

「邪魔になる、退かぬか、退かぬか、えゝ！ 退かぬかといふに。」

語勢烈しく頭上に迫るに、走り退かむと心は急げど、一步をあやまれば九仞の谷の眞底に落ちむず危

さ。身を起すべくもあらざるにぞ、さゝやかになり
て踞まる。

「おのれ、退かぬな、退かねば、可

し。」とはや何等か、害を加へむとする氣勢、聞
覺えある聲音なり。予が心決まりぬ。

激しくものをいはむとして、打ちふるうたる唇を、
ひらかせあへずひしと蔽ひて、耳に囁く優しき聲あ
り。

「黙つて、黙つて、新さん、私だよ、私だよ。」

と、忍音ながら力の籠れる、教會なる操の聲なり。
口には堅く蓋されたれば、切なき胸の躍るのみ。

「黙つておいでよ、恐うござんすから。可いから、
私が居るからね。」

と背後に居てもものいへりし、渠が身は衝と前にま
はりて、予を其胸に抱き緊め、兩の袖もて項を蔽ひ
て、

「可うござんすか。ぢつとして、静にしておいで

なさいよ。恐うござんすからね。」

とひそめき告ぐ。暗きなかに、わが顔は渠の胸に
ひたとつきたれば、其姿は見えざれど、ひたすらも
のゝ恐しければ謂はるゝまゝにいきをひそめて、身
動きもせで取継れり。

爾時聲を高うして、

「はい、はい、あの、新さんはもう歸りました。」

此處には居りません。はい、いゝえ、まツたくです。
何の私が秘ますものですか。―― 神よ守らせた

まへー

とて其額をつけたらむ、わが肩ものに觸るゝを感
ず。婦は黙して打念ずる氣勢なりしが、恐しい聲は
聞えずなりぬ。

「もうようござんす。さ、」

と婦人は予を放たむとしたりけるが、急にまたしつかと抱けり。わが居たる上の峰の方にて、細く清き聲のやゝふるへたるが、

「新ちゃん。」

と呼懸けたり。

胸に徹する聲なり。予は耳を敬てぬ。

「黙つて、黙つて。」

とまたさゝやきいへり。

「新ちゃん。」

やゝありて、

「新ちゃん、新ちゃんぢやないの。あれ。」

予は答へむとして顔を上げるに、操はひとばかりおさへたる手を弛めず、

「何故、然うですよ。ものをいつちや悪いといふのに、年上のいふこと肯くもんです。」

とひそめきながら、叱るが如くたしなめられて、心ならずも黙してけり。

「新ちゃん、新ちゃん、新ちゃんといふのにさ。」

「いゝえ、いゝえ、いけません、返事をしちやいけません。いふことお肯きなさらないとミリヤアドにいひつけて叱らしてあげます。」

と屹となりて戒めいふ。

峰の上にては、しばし聲の途絶えたるが、此時また、

「あの、新ちゃん、其處において遊ぶのは新ちゃんではござんせんか。」

「違ひます、何の、こんな處、新さんの来るやうな處ぢやございませぬ。新さんはこんな處へ来るものですか、私の、私のいゝ兒はね、富の市ぢやありません。」

「あ。」といふ叫、耳にのこりて、峰の上ひツそとなりたり。

予は懸念に堪へず、振りはなさむと身をあせるに、彼の人少しく手を弛べて、

「ね、何にもあなたを呼んでやしないの。みんな僻耳です。新ちゃんノてきこえたつて

そりや山鳩の聲でせう。あれノノノ、鳴いてるの

が聞えませう。」

耳を澄せば果せるかな、遙かに遠く、三ツ山、四ツ谷、十森の彼方の、洞の中の奥深く鳴くかくと思ふ心地せり。

「いまのうちに早く、さあ、お歸り。」

と姿なきものゝ導くをば、怪しともみざりしが、たしかに秀のわが名を呼びたる、上なる峰に心残りて、さまでに渠が戒めたる、緘黙の掟を破りつ。

「姉さん、姉さんかい。」 とばかり峰を仰ぎ呼びぬ。

「おゝ新ちゃん。」

と應ふるに、堪らず走り寄りむとせる、わが手をむずと引留めて、

「おい。」

と寂びたる聲を懸くる。呵呀と見ればいまのいま、予を護りたる操はあらで、世にも恐しき富の市の、左手に予が手を扼り、右手には秀の腕を掴みて、深さ幾丈とも分たざる、眞暗き谷に臨み居れり。

「おにげなさいよう。新ちゃん、あれ！」

富の市は苦しげに吐息をつき、

「秀さん、こ、こゝを見て、私がこゝを見て。だ、だれがこんなにしました。」

と矢庭に秀を引寄せて、其胸をさしつけたる、肋骨白く見え透きて、譬へば拳の入らむばかり、胸の一部の肉を抉りて、背にも届かむ穴あきて、眞蒼に黒き皮膚を染めつゝ、鮮血其疵口より噴出でたり。

「こゝ、こゝ。」と富の市は、予を、捉へたる手を放ちて、秀に疵口を指したる、節たかき指の尖わなゝきぬ。

今はハヤわるびれたる状なくて、肅然と立つたりし、秀の項に手をからみて、横倒れになつたる富の市！ひとしく崖をふみはづして、あはやと見るまに陥りぬ。

白き踵のちら／＼と、空より雪の降るかのやう、眞暗き谷の底へ、底の方へ、ずん／＼ずん／＼ずん／＼と果なき深みにおちいりゆく、秀を見るわれ堪ふべきや。

續いて飛込まむと片足かけて、屹と瞰下したる谷の底より、綿の如き白雲の、むら／＼と渦き出で、谷一面にひろがり、蔓り、かさなりあひて、恰も蓋したらむ如き奇観に驚き、茫然として見詰めたる、谷の半ばの雲の中に、浮みもやらず沈みもはてゞ、秀のみ一人漂へり。

月に銀波の輝く如く、折から洩れたる有明月の、絲の如きがきら／＼と、かの白雲をぞ照したる。秀の黒髪颯と亂れて、横ざまに臥したるにぞ、予は心地酔へるが如く、再び足を爪立てき。

「新次！」

と一聲背後より、妙なる聲のいと清きが、少しく怒を含みて呼ぶに、胸を打ちて見返りぬ。

茶博多の帯、胸高に占めたまひし、亡き母の胸のあたりのみ、わが頭より少しく上に、月あかりに仄見えたり。

飛隄りたる手はそれで、それかと思ふまぼろしの、白雲みてる谷間を切つて、矢よりも疾く一文字に、

むかひの山やまにわたりゆき、岬みさの如ごとき峰みねのはしに、一
本高もとたかき松まつの梢こずえに、斜ななめにかゝれる月つきの上うへに、後姿うしろすがたの項うなじ
のあたり黒髪くろかみそよ／＼と靡なびくと見みえしが、一刷ひとはけ淡あはき
朝霧あさぎりのしら／＼とばかり姿すがたうすれて、東雲しのゝめ高たかく消失きえう
せたまひぬ。とばかりありて夢ゆめさめたり。胸むねの中うち
安やすからず、秀ひでの身みの心許こころざせなさ限りかきなかりき。

予が日毎、醫師の許に通へる路は、かの黒淵の裏にはあらず、紫谷が家の表の門を、よぎなくいつも通りしなり。

人知れず心咎むれば、其と向ひ合ひたる家の、裏庭の柴垣の方に身を寄せては、足早に過ぐるを例としき。さりながら昨日一昨日、おなじ其柴垣の、とある棕櫚繩の結目に如何ならむか鳥の抜毛の、一片の雪の縁を墨もて細く染めたる如きが、風、雨にも取り去られでかゝりたる、おなじ處に袂觸れて、われ知らず立淀むを、心着くまゝ、人やあるとあたりを見ては、慌しうぞ立去りたる。

醫師は紫谷のならびにて、一町ばかり隔りたる曲角の邸なり。十日目の朝なりけむ。近きあたりの病家より、迎ふるまゝ出でたりとて、先生は留守なりといふ。

「別に診て頂かなくても、かはつたことはございません。お薬だけ頂きませう。」と傍に置きたる、水薬の瓶を取り、藥局の卓に出さむとして、ふと見れば違うたわり。おなじほどに見えたるが、予が量よりも小さき瓶に、紫谷氏令息新三郎君とぞ書いた

りける。

「あゝ。「藥局の書生はむかうより覗き見て、

「そりや、何です。このさきの紫谷の兒様なんで、

お名がちよいと似てますから。」といひかけて打

笑みたり。恚は誰が名づけしぞ。秀の子の頭字は

予とおなじ。予とおなじ。と思ひしが、みつめてし

ばらく放ち得ざりいき。

「病氣ですか。何、薬を取りに来れば病氣に違つ

たことはないけど。」と予は故と微笑みぬ。

藥局生は何氣なく、

「しかし、そのお子はもうよくなりました。いま

お不快のは御新姐様で、實は先生も紫谷へ参つたん

です。」

歸途にもまた知らず、柴垣に寄添ひて、紫谷の

門を見たる時、予は更に懸念なきこと能はず。さ

らぬだに去し夜の、不快なる夢もあるを、秀が身に

疾病ありとは。奥深き家の勝手の方に下婢どもの語

るらむ、婦人の聲もれ聞ゆる。門には二頭の荷駄馬

あり。近山より薪、炭など持運ぶものなるが、悠々と秣食ひ居れる、草どもあちこち取亂せし門邊に風もあらざるにぞ、心少しく安んじたり。おのが病氣に思ひ至りて、手にせる薬瓶に心着けば、予が名を著したるレツテルの、むかうざまに、紫谷の門に向きたるにぞ、はつとばかりに袖以て蔽ひぬ。日毎おなじ時、おなじ處を過る身の、いつとなく家内の目に留りて、遠目にも予が名を知られむかと、門前を通るには、必ず瓶を蔽ひ隠して、予が名のうはさされざるやう、上杉といふ言の、一言も秀の耳に入らざるやう、はた秀をして思ひ起さざらしめむと勉めたる、心づかひを人知るや。

几帳きぢやう

前年ぜんねん深水ふかみの店みせに居ゐたる友吉ともきちの、家いへを持もちて、おなじ時とけい計てん店ひらを開ひらきたるに、一日あるひとほり通つう懸けんりの予よは期きせずして呼よびこ込こまれぬ。打出うちいでゝは醫い師しにも聞ききづらかりし秀ひでの容よう體たいは、今いまもよりノ紫むらや谷やに出入でいりをすなる、渠かれの口くちより語かたられき。

「新しんちゃん、さあ、またゞ、もう、いまぢや何ど處こか大おと人なぶつて、斯かう見みてると、いやにお澄すましで、つらにくが憎にくい。ほい悪わる氣きでなし、ほんとのことことでさ。新しんちゃんといふ柄がらぢやおあんなんなさらないけれど、まあ、御ご免めん蒙かうむつて、いひ馴なれた處ところでやつときませう。新しんちゃん、こゝで、あいよ、といつて下くださらないと調てう子しが悪わるいな。はゝゝゝ、笑わらひごつちやありません。ほんに私わつし等らも、ないノ、心しん配ぱいして居ゐますがね。困こまつたもんです。ぷらノ、やまひで、何なんとも方ほうがつかないで、お醫い者しゃもかたがつて居ゐるんださうで。如あ彼や弱よわ々くしくお見みえなすつても、あれで、どうして御ご氣き象しやうもんでおいでなさるから、どんなに氣きむづかしくつても、鬢びんの毛けい一ひと筋すぢぶらさげておいでなさらうぢやなし、まだ深あ水さとの時じ分ぶんは、あれでもあどけなくツて

在らつしつただけけれど、むかうへお輿入のあつた
あとは、ちやんとしまつて、高い聲でお笑ひも出な
いばかり、其の癖ちつとも澄さないで、今でも私が
伺ひに出入りや、友さんかえ、といふお聲懸。始終
笑顔で在らつしやるつて、彼處の女中衆もいつてま
す。何時も奥様の不機嫌な顔つては見たことはあり
ません。其で、ちやんとおもしろが利いて、支店、
本店、何十人といふ奉公人が奥様といふ聲が懸ると、
そりや居ずまひを直します。一體がらが大きいので、
きりゝとして立たせると、まつたくあたりを拂むま
さ。

其で居て例の通りお優しくつて、庭の草取にだつ
てぞんざいな言をお懸けなさるでなし、坊ちやんが
小間使をお使ひなすつても、新ちやん、御苦勞だつ
たと、さうおつしやいよ、とかういふ調子ですもの。
だから御覽なさい、いつぞやも紫谷で舊諸侯のお
宿をなすつた時も、其のまた御臺様がね、新ちやん、
孔雀の土用干見たやうな洋服かなんかで、いやに反
りやあがつて、横柄なことをいつたもんなら、さあ
小間使どもが、何でさ、内の奥様にだつて、呼ずて
にはされやしない私たちだ。何の西洋手品の幕ン中

で風琴を引張らうといふ身で、生意氣なつて、同盟罷工をやらうとした位でさ。華族の奥様だつて、面とむかつちや聖目です。紫谷のといへば聞えたもので、誰だつて立停ります。美しいツてことは私のおふくるだつて知つてますけれど、あの方は出ぎらひな質だから、見たものは餘りないので、私だつて何ですぜ、あ、この廣大もない邸ン中にや秀さんが居るなと思ふと、何だか其奥ゆかしさといふものは、几帳の蔭にでも在らつしやるやうな氣かして、紫谷の門の前を通る毎にや、懐しいやうな、貴いやうな、嬉しいやうな、泣きたいやうな、え、泣きたいツて、何です、たゞ譯のわからない氣がしますんですから、然ういつて見たものです。

妙ぢやありませんか。人の身分といふものは、もう、あの方ななぎ、おうまれなさると直ぐにあゝいふ果報が備はつて居たんですね。何だつて、新ぢやん、お家は、アノ通り、名所の瀧がひとつ庭にあらうといふ位、姑はなし、可愛い坊ぢやんはおできなさる、旦那はあの通りのお人品で、まるで坊ぢやんでさ。ちつとは浮氣もなされば、お妾もあるけれど、何があのお奥様だから、妾の方で恐れ入つて、小さく

なつて、とても叶はないものとあきらめて居るんで、
旦那に殺文句ひとつ言はうでなし、あんな奥様があるの
にまあ旦那はお茶人ぢやないかつて、人の前で笑つてま
さ。平氣なもんです。みんなが懐いて心底から大切に
して居るので、氣あつかひをなさらうでなし、御兩親も
お達者だし、ほんとでさ。それにもうちやんとお位が
そなはつて、争はれないもんですね。深水においで
の頃は悪くすると背中の一ツくらゐ叩きかねなかつた
私だけれど、今ぢや何うしてむかうではおかはりなく、
友さん、とおつしやるけれど、其聲を聞くと何だか冥
加ないやうで、嬉しいやうで、恐れ多いことだと思つて、
おのづと俯いてしまひますよ。すると、この病氣といふ
ものが、錢金づくぢやいけないんで、何に不足のない
方でも、こいつだけは仕方がないんです。それもね、踏
脱いだせゐで噎をするとか、くらひ酔つて頭痛かすると
かいふんなら、まだ斷めも着くんでさ。

妙なことをいふやうですが、新ちやん、お醫者に
や分らなくツても、私なんざ知つてますぜ。富の市
ね、彼です。御病氣のもととは彼なんです。彼奴あ何
で、如終何です、紫谷へ其の、ぬつと入つちや出て

来ますがね、え、怪しからんぢやありませんか。

一體さう毎日ノ、何の用がありますものか。深水だつて何でさ、大したお知己といふんぢやなし、ほんの見知越であつたばかり、其家の娘さんが縁着いたからつて、嫁入先へさうノ、押懸る奴が何處にあるもんです。いえ、何も私がこゝで威張つたつて仕様のあることぢやないんですけれど、頃はもう毎日だ、といふから呆れるでせう。さうかといつて、別に亂暴もしないものを追出すといふ譯にやゆかず、物貰ひでもないものを巡査に引渡す分ぢやなし、彼でなまじつか、いゝ家の跡取だけに、いま私の家へやつて来た處で、矢張ともかくもお客でさ。まいあ富の市さんといふので、そりや番茶でも出さなければならぬといふもんです。そこは勝手でも氣を着けて、今日はお奥で少しお取込が、と恚う先づやります。それでもちつとも、おかまひなし。はあ左様ですか、といったきり平氣であがり込む。それでもいけないんで、敬して何とやらいふ術ださうで、番頭さんのさしがねで、彼奴を据ゑるやうにして、いや、御上使の格であつかつて、何ぞ御用でございましてら手前までさうおつしやつて遣はさりま

し、といはせて見ると、ニヤリと笑つて、いえ、用
はありません。遊びに と恚うでさ。さ
あ、さういふものを何とも仕方がないので、相手に
ならないで引退ると、誰に談話をしようでもなし、
ぼんやりと火鉢の前へ坐つて見たり、庭前へ立つて
居たり、襖蔭に踏つたり。
悪くすると、秀さんがばつたり出ツくはす、其時
は顔色がおかはんなさるさうで、あゝいふ方だから
目に見えりや、うつちやつてお置きなさらず、ちと
おはなしなさいましなんて、あひかはらずおつしや
るさうですが、新ちゃん困つたもんぢやありません
か。はじめの内こそ、皆が嫌な奴だ、憎らしい按
摩だつて、敷居の上へ煙草盆を置いて躓かさうの、
目が見えないから憚りなし箒を立てる、鹽を撒くと、
それでもまあいくらか取合つて居たさうですが、い
まぢやもう女中衆なんざ、氣味を悪がつて夢に見て
魘されるといふ化方です。そら、瘡ツこけて、顔色
の蒼いによつて如件、といふ白痘痕の、眉の消えさ
うなのが、日ましにやつれて、肩をゆすツて、鼻呼
吸がふん／＼。それでニヤリと來た日にや、ちいつ
と人間にしちや行過ぎてます。お互だつて驚きまさ

あね、暮合くれあひなんざ不氣味ぶきみでせう。人間にんげんも何なんです、まだまあ人の眼顔めがほが見えたり、差さしをくる内うちや色氣いろけがありますけれども、もうあゝなつちや捨鉢すてはちでね、始しまつにおへたもんぢやアありません。

飛とんだ魔まものに魅み込まれなすつた、秀ひでさんがお可哀かはい相うでさ、いつたやうな御氣象ごきしやうで、別べつに床とこに就ついて入いらつしやりもせず、屈託くつたく顔がほもなさらないけれど、ちやんとして在いらつしやりや、在いらつしやるほど、帶おびのしめ工合くあひまでが、まるで切せつないのをおさへつけておいでなさる様やうに見えるんです。私わつしあ思おもひますかね、まつすぐに屹きつと立たつたものは、バツタりと倒たふれるでせう、ほい、鶴龜つるかめ。ものゝ譬たとへでさ。案あんじ過すこすのもそんなことがあつちやならないと思おもひますからのことです。さうかといつて何處どこがどうといふでもなければ、お食しも細ほそるツて風説うはなだし、新しんちやん、思おもひなしが知りませんが、何だかあの莞爾にっこりお笑わらひなさるのが、寂さびしくおんなすつたやうで、情なさけなくつてなりません。」と友吉ともきちはいひかけて、煙管きせる持もてる手の火鉢ひばちの上うへに暗くらうなるに、透すがして予よが面おもてを見みしが、「おや、新しんちやん、何どうかなさりやしませんか。」

「否。^{いへえ}」
といふ時、^{とき}
駒下駄の音高く、^{こまげた}
店頭にか^{みせさき}
ラリと止む。^や

三日月^{みかづき}

婀娜たる聲せり。^{あだこゑ}

「友さん、お精が出ますね。」友吉は頸をのばして、

「よう、お部屋様。」

「厭だよ、不景氣な。」

「いえね、今もさう申して居た處でございますよ。何うも紫谷のお部屋様はおうつくしう在らつしやるつて。」

「ふう、」と笑ひながら面を背けて、柱に背を凭たせつゝ、たそがれの空を仰ぎ、

「おゝ、三日月様だ。」と呟きつゝ、急に二足ばかり外へ出でゝ、

「あ、あ、新ちゃん、新ちゃん。」予は振り返りぬ。

「乳母さん、此處だよ、此處だよ。」と手招ぎせり。乳母なるべし。容色よき婦人、四つばかりの愛々しきをさなごの手をひきて、招かるゝまゝ此方に向ひて來ぬ。

「あれ、坊ちやま、お銀さんが。」といひかけて乳母は立停れり。お銀といへるは、紅の褌を踞ひて、をさなごの手をおのが手に持添へる。

友吉は微笑みて、斜に顔を傾けたり。

「坊ちやん、入らつしやいまし。」

乳母は其屑に手を懸けながら、

「あい、と御挨拶を遊ばしました。」

心着けられてをさなごは、

「あ。」といひながら傾きぬ。

「はい／＼、今日は。」

「お利口ですなえ。よくお覚え遊ばした。」と

お銀は其首を撫でぬ。

「こちらの兄様にも、御挨拶遊ばせな。」

何を予に思へとや、秀の兒を推向くる。愛らしき

目の予を膽りて、また其頭を下げたる時、

「あら、ちよいとあなた御覽遊ばせ。」と予を

顧みてお銀といへるが、あでやかにほゝ笑みぬ。

あはれ、予をして抱かしめよ。予は其胸に額を伏し

て、思ひのたけを泣くべきなり。

予はたゞ笑を含みしのみ、ものをもいはで頷きぬ。

やゝありて乳母はお銀にいふ。

「お湯ですか。」

「はあ、お前さんは。」

「何處へ。」と友吉もまた問ひたり。

乳母は其答はせで、屑越にをさなごの顔を差覗き、

「坊ちゃん、何處へ行つて参りましたつけね、ね、坊ちゃん。」と裏問ひぬ。をさなごは答へ得で、いぶかしげに乳母の顔を見たり。乳母は空を仰ぎて三日月を指しながら、

「のゝ様ね、のゝ様。」

月は恰もむかひの家の土藏の屋根と、角家の窓とのあひだに、すら／＼とたけのびたる柳の梢に青くかゝれり。乳母の言に因りて、をさなごはさとりけむ、いたいけなる掌を犄と合せて、三日月を打仰ぎ、

「母様。病氣、のゝ様、あ、のゝ様、あゝ。」

と伏拝む、足許の覺束なく、よろけては、乳母の手に支へられ、うつくしき迷子札ゆら／＼と淺黄縮緬の帯房やかに結びてさげ、また拝みて屈むとて、砂を掃くにぞ、お銀は其尖を掲げ持てり。人々は見て目を合せぬ。をさなごはなほ人の答へざるに繰返しは伏拝めり。

「のゝ様、あゝ、のゝ様、あゝ、」

堪へずなりけむ、お銀は店頭に踞ひたるまゝ、横様に膝に抱きあげて、

「おゝ、いまに快くおなり遊ばしますよ。母様が

御病氣で、お寂しからう、おかはいさうに。」と
涙ぐむ。友吉は屹と乳母を見て、

「乳母さん、悪いこつちやないが、情ないことを
敦へるね。」と顔を背向けてしばたゝきぬ。乳
齒はしをれて首を低れたり。

「はい、さうおつしやれば、なるほど私が悪うご
ざいました。ついおもりがてらにおまゐりをします
もんですから、いつかお覚えあそばして

坊ちやま御堪忍なさいまし。もうノ、母様はすぐに
よくおなり遊ばしますから、そんなこと遊ばすんぢ
やございませぬ。御氣がお鬱ぎ遊ばすかして奥様が
輕う御ものもおつしやらず。お抱き遊ばしてもたゞ
お顔ばかり見つめておいで遊ばすので、私でさへ心
寂しいもの、坊ちやまはどんなでせう。乳母や、母
様かと蔭でそつとおつしやると、もうノ、胸が裂け
るやうで。」といひかけしが聲うるみき。時に
三日月のかけ淡く、人々のかほ仄になりたり。肋骨
白く血の色の黒かりし盲人の佛の、予が眼を遮りし
が、あれと見る時柱に消えき。片膝立ちぬ。富の市！

【四之卷・完】